

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2014年4月6日

[テーマ] 大雪被害から学ぶ将来への対応

2014年度がスタートした。新社会人や新入生にとっては、新しい環境のもとで、期待と不安が交錯する生活を迎えているだろう。

県内は、満開の桜を楽しむ人々ににぎわっている。わずか2か月前の2月半ばに、観測史上最大の大雪を経験したことを、すっかり忘れてしまうほどの陽気だ。しかし、大雪被害の爪痕は今なお大きく残る。

県の推計では、農家の総被害額は422億円、商工業では11億円に上る。企業では挽回生産を進めているが、農家の施設復旧は資材不足もあって遅れ気味だ。心からお見舞い申し上げるとともに、早期の再建を望みたい。

自然災害の少ない県と考えられていただけに、今回の大雪を「想定外」の出来事と捉える人は少なくない。ところが、「想定外」という言葉は、これまでも数多く使われてきた。2008年のリーマン・ショックや11年の東日本大震災は記憶に新しい。

さかのぼれば、1990年代前半のバブル崩壊や後半の金融危機もそうだった。「想定外」の出来事は、様々な事象で発生するが、人々の生活や企業活動に影響を及ぼす点では共通だ。

将来、危険や損失を被る可能性をリスク、そのリスクへの対応を事前に検討し行動することをリスク管理と呼ぶ。リスクへの対応は、回避（リスクのある活動からの撤退など）、低減（リスクのある取引の制限など）、共有（保険への加入など）、受容（許容範囲なので対応しない）など様々だ。どの対応を取るかは人それぞれで、対応にかかる負担も異なる。当然、リスクが表れた際の被害や損失も多様だ。大雪被害をきっかけに、リスクへの対応が適切か、それぞれの立場で考えることが必要だろう。

人や企業のつながりの大切さも、今回の大雪で改めて浮き彫りになったのではないだろうか。大雪に関する県建設業協会の会員向けアンケート調査結果をみると、除雪作業の依頼が自治体だけでなく民間企業からも寄せられ、機械や作業員が不足するなかで懸命に対応した建設業者の姿が想像される。「除雪当初喜んでいた人が、時間がたつにしたがい苦情を言ってくる」などの生の声を読んで、自分本位の主張ばかりだと信頼し合える人間関係が築けないことを考えさせられる。

◆ 除雪作業の要請を受けた県内の建設会社の数（複数回答あり）

要請元	国	県	市町村	東日本 高速道路	民間	その他
社数	18	210	244	10	184	59

（出所）県建設業協会

新社会人や新入生には、これからの人生に潜むリスクへの対応を自ら考えて行動し、新たに出会う人々とのつながりを大切にすることを心から願っている。

（ 日本銀行前橋支店長  
相良 雅幸 ）